The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	マルスリーヌになぜ兄が二人いたのか : Gide の四つのレシと『福音書』の構造
Author(s)	打田, 素之
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1987, 21, p. 37-50
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47828
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

マルスリーヌになぜ兄が二人いたのか
——Gide の四つのレシと『福音書』の構造——

打　田　素　之

「マルスリーヌになぜ兄が二人いたのか」という問いは、「『イザベル』の中で、カジミールがなぜ論文を書いていたのか」と問うことに等しい。カジミールの行動の意味を探ることは、マルスリーヌの家族関係の背後に隠されたものを明らかにしてくれる。

先の研究において[1]、我々はレシ（récit）における《histoire》[2]（時間軸にそった出来事の連鎖）を分析し、Gide のこのジャンルに属する作品を構造上『贋金つかい』(1926)以前の四作品『背徳者』(1902)『狭き門』(1909)『イザベル』(1911)『田園交響楽』(1919)に限定しえた。これら四作品は《histoire》のレベルにおいて類似性が認められたが、《personnage》のレベルにおいても類似性を指摘することが可能である。そしてその類似性は、四つのレシを構成する共通の機構（メカニスム）と深く結びついている。本稿ではそれを明らかにすることによって、上の問いに答えたいと思う。

まず、レシの人物関係から見て行こう。

1　レシの人物関係

『田園交響楽』のヒロイン、ジェルトリュードは、最初、牧師の新たな娘として登場する。ところが、彼の「娘のサラより少し年下に違いなかった」[3]（p. 885）彼女は、しばらくすると「私達が初め思ったよりも、かなり年上らしかった」（p. 899）と語られるようになり、第一の手帳の最後で

は、牧師に愛を告白するまでになる。

『狭き門』のアリサは、ジェロームの従姉であるが、二人は子供の頃から姉弟のようにして育てられ[4]、彼女は手紙の中で彼のことを、しばしば“mon frère”と呼ぶ[5]。また彼女の日記には、次のような記述がある。

> ジェローム！私の友よ、あなたのことを今でも弟と呼んでいるけれど、弟よりももっと愛しいジェロームよ…（p. 591）

彼女はジェロームの求婚を拒否し、彼の妻になることはないが、二人の恋愛関係は、彼女の死に至るまで続く。そして彼らの関係は、ジュリエットの娘アリサがエピローグで登場するに及んで、形を変えて現われる。ジェロームは彼女の代父（parrain）となる。ここでアリサは、ジェルトリュードが、同時に牧師の娘であり、恋人であったように、ジェロームの姉であり、恋人であり、さらに娘となる。

以上二作品は、主人公の交渉範囲が家族・親戚に限定されているため、そこに描かれる恋愛は、多分に近親相姦的な性格を持っている。それ故、女性主人公が男性主人公に対して、複数の近親を同時に演ずる構図が比較的容易に見て取られる。では主人公の肉親が全く登場しない『イザベル』の場合はどうであろう。

このレシは、語り手であるジェラールの家族とは何ら関係のないラ・カルフールシュが舞台となっているため、登場人物間に実際の肉親関係を見出すことはできない。しかし彼が後年、ラ・カルフールシュから「ほど遠からぬ」ラ・R…を領地に持つB家の娘と結婚する（p. 674）ことは、一つの示唆を与えてくれる。イザベルのかつての恋人、ブレーズ・ドゥ・ゴンフルヴィル子爵は、サン・トレオール家の隣家の長男である。彼もジェラールも、イザベルの悪女的側面に気づかず、彼女に恋し、前者は駆け落

ちの直前に裏切られ、後者は彼女と実際に言葉を交すことによって、その理想の女性像を打ち砕かれる。すなわち、物語に組み込まれたパターンから言えば、子爵の恋はジェラールの恋の先取りとなっている。また子爵とイザベルの息子カジミールは、まるでジェラールの行動をまねるかのように神父と論文 (thèse) を書いている（ジェラールが、ラ・カルフールシュを訪れたのも論文（thèse）執筆が目的である)。前者の論文作成が、単に神父の写字を助けるための口実にすぎないのと同様、ジェラールの論文もラ・カルフールシュ滞在のための口実にすぎなくなる。また彼らがイザベルに恋焦がれながら、容易に彼女と会えないことは言うまでもない。従ってジェラールは子爵と相似であると同時に、その息子とも相似の関係にある[6)]。さらにテキストには、イザベルが従兄と結婚したかのような情報も与えられている (p. 635)。このようにイザベルは、ジェラールの恋人であり、子爵との間に子供があることから事実上の妻であり、母であり、従妹の可能性さえ持った存在だと言える。

『背徳者』を考えてみよう。このレシの女性主人公マルスリーヌは、他のヒロイン達と同列に論じることはできない。彼女らが、主人公の désir の直接の対象（Objet）となっていたのに対し、マルスリーヌは、物語の後半において徐々に Objet として存在し始めるとはいえ、常にミシェルの直接的な désir の対象とはなっていない。しかし、彼らの関係にも、『イザベル』の分析と同様の方法を用いることによって、他のレシに見られたような関係を指摘することができる。

まず注目しなければならないことは、マルスリーヌがミシェルと同じく孤児で[7)]、肉親は二人の兄（または弟）しかいないことである《Elle était orpheline aussi et vivait avec ses deux frères.》(p. 373)。ミシェルに血のつながった兄弟はないが、第二部に登場するメナルクは、彼の分身と考えられる。メナルクはミシェルの後を追うようにしてアフリカへ渡り、

帰仏後「あるばかばかしい、破廉恥な、スキャンダルの訴訟」(p. 425) が原因で、新聞の攻撃を受ける。その後、彼は「植民省から新しい使命を託され」(p. 431)、再びヨーロッパを発つ。この軌跡は、ミシェルのアフリカ、ラ・モリニエールでの体験をなぞるものであり、作品冒頭に付された、語り手が内閣議長 D.R. に宛てた手紙から予想されるミシェルの運命を予告している。これらの事実とメナルクが作中で語る思想 (p. 426〜p. 437)[8] を考慮に入れるなら、彼はミシェルの alter ego、あるいは双児の兄弟と言ってよい。従って、ミシェルより四歳年下 (p. 373) のマルスリーヌは、物語の構造的パターンから言えば、彼の妻であると同時に妹でもある。また彼女が第二部二章で死産する子供は、『聖書』(『ローマ人への手紙』Ⅵ・6) に言う「古き人」としてのミシェルの死、すなわち彼の社会への復帰を暗示しているとも考えられる。ここでマルスリーヌは彼の母である可能性をも秘めている。

こうした一女性登場人物によって複数の肉親が同時に演じられるという図式は, Gide のレシにおいてのみ認められる特徴であろうか。この問いには、イギリスの人類学者 Edmund Leach が『聖書』の構造分析によって明らかにした、キリストとマリアの関係が答えてくれる。Leach によれば、

> ヘレニズム時代の比較的終わりに近い頃、実在のファラオを取り巻いていた宗教的イデオロギーは、高度に凝縮された形で、ある特殊な宗教的理念の構造を具現するに到っていた(…)。これと同じ構造の形を組み換えたものは、聖書の中の挿話として現われる。しかし、明瞭な筋(プロット)のレヴェルでも構造的パターンのレヴェルでも、ユダヤ-キリスト教型はエジプト型の変形にほかならない (…)[9]。

ここに言う「実在のファラオを取り巻いていた宗教的イデオロギー」、「エジプト型の構造的パターン」とは、自分の妹である女神イシスと結婚し、弟であるセトによって殺されるオシリス神の物語である。このパターンはかなり直接的に『創世記』(アブラハムとサラ)、『出エジプト記』(モーセとミリアム) において踏襲され、『新約聖書』においてもモーセと同じく「受肉した神の属性を有する」[10] キリストとマリアの関係に見られる[11]。すなわちキリスト教における神話上の論理は、イエスの母、妻、恋人、姉(妹)、娘が、ただ一人の人物マリアによって演じられることを要求しているのである。

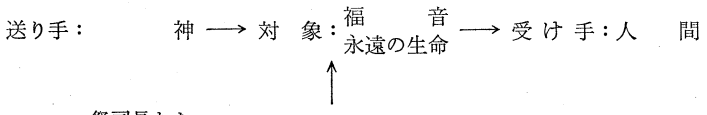
もちろん近親相姦的に複数の役割を演ずる女性主人公は、多くの西洋文学において指摘しうることであるが[12]、問題はその源泉の一つに『聖書』が存在することであり、Leach の言う物語を構成する「構造的パターン」が、Gide のレシにもまるで『聖書』と同じように現われることである。Leach によれば、洗礼者ヨハネの処刑は、キリスト磔刑の予表であり[13]、『ヨハネ伝』のラザロは、「その死と復活の様態から見て、イエスの他我(アルター・エゴ)である。」[14] これは、我々が『イザベル』『背徳者』の分析の際、明らかにしたパターンと同一のものである。従って Gide のレシは、人物関係を中心に見た場合、『福音書』の構造に倣うかのように組み立てられている。

また言うまでもなく、レシには『福音書』からの引用、あるいは借用と思われる部分が多数存在する。『狭き門』の扉の裏には『ルカ伝』の引用が見られるし、Andrew Oliver は、『背徳者』においてマルスリーヌが死ぬ間際に三度数珠 (chapelet) を取り落すことを[15]、ペテロの三度の否認と関連づけている。『田園交響楽』最後の「私は心が砂漠以上にかわいているのを感じた。」(p. 930) という牧師の言葉は、このレシ同様、水のイメージの多い『ヨハネ伝』でキリストが、十字架上で発する「わたしは、かわく」(XXI・28)[16] という言葉を連想させる[17]。この最後の例は、「牧

師＝キリスト」[18] という等式の成立を想定しているわけだが、我々の研究によれば、構造上レシとみなしうる作品の数は、「四」であった。上の分析で見たように、レシの主人公は、その女性主人公との関係から構造上『福音書』のキリストの位置にある。ここには、「レシの主人公＝キリスト」という等式が想定されている。両者の関係は単に人物関係のレベルにおいてのみ等式が成り立つのであろうか。そこで、この問題を今度は《histoire》のレベルから検討してみよう。

2　キリストの《histoire》

Gide のレシは、背景となる時・場所に一致する点はないが、いずれも一男性主人公の軌跡を物語り、その多くは女性主人公との恋愛が中心テーマであった。もとより『福音書』は、キリストと女性登場人物の関係を中心として語られたものではないが、両者ともその構造から見れば、一男性主人公の歴史を主筋としたものであると言えよう。それ故、『福音書』の《histoire》を分析するには、レシのそれと同じく、主人公キリストの行動を一貫して動機づける désir を明確にする必要がある。A.J. Greimas による actant の図式を『聖書』に適用した例が示すように、キリストを支配するモチーフは「永遠の生命の獲得」、「福音を人類にもたらすこと」と定義してよかろう。



（L. Marin.「墓における女たち」[19] より）

この行動原理は、いずれの『福音書』においても変わらない。キリストを

支配する désir の単一性は、『福音書』の《histoire》をレシの《histoire》と同様の観点、すなわち主人公（Sujet）の目的（désir）は達成されたのかどうかという観点からの分析を可能にする。

キリストの物語は、ほぼ次のような展開を見せる。誕生→ヨハネによる洗礼→伝道／奇蹟→エルサレム入城→捕縛→審問→死刑→復活、である。『ヨハネ伝』のみが他の『共観福音書』と著しく内容を異にするが、上記の流れは各『福音書』共通に認められる。この《histoire》の中でキリストの敵対者として登場するのは、祭司長、長老らを代表とする彼を認めないユダヤ人達である。レシを分析した際、主人公の欲望成就（Objet の獲得）を阻む対立者（Opposant）を作中に現れる具体的な人物と考えたように、ここでもキリストの福音伝道を阻む障害は、『福音書』中に登場する具体的な人物と考える。Marin の分析は、『福音書』のほとんど最後に位置するエピソード[20]を直接の対象としていることから、対立者が限定されているが、『福音書』全体を分析対象とする場合は、さらに律法学者、パリサイ人らをつけ加えることができよう。ユダに関しては、最初キリストの教えに共感し、伝道につき従っていたわけだから、純粋の対立者とみなすことはできず、この項から外すことにする。

対立者を祭司長・長老・律法学者・パリサイ人らと限定すると、『福音書』の《histoire》は、単純な物語単位から構成されていることがわかる。レシの分析同様、主人公の立場、すなわちキリストに視点を置いて分析を試みると、それは「不信仰の発生（障害の発生）」→「ユダヤ人との対決（障害除去の試み）」→「勝利／敗北（成功／失敗）」となる。この物語単位は、『福音書』に大きく二つ組み込まれている。『共観福音書』の共通資料となっている『マルコ伝』を例として考えると、Ⅲ章2、6節に次のような文章がある。

人々はイエスを訴えようと思って、安息日にその人をいやされるかどうかをうかがっていた（Ⅲ・2）。

パリサイ人たちは出て行って、すぐにヘロデ党の者たちと、なんとかしてイエスを殺そうと相談しはじめた（Ⅲ・6、下線筆者）。

これと同じくイエス殺害に言及する文章は、エルサレム入城後のXIV章1節に見える。

祭司長たちや律法学者たちは、策略をもってイエスを捕えたうえ、なんとかして殺そうと計っていた（XIV・1、下線筆者）。

事情は『マタイ伝』『ルカ伝』においても同じである（次のページの表参照）。資料を異にする『ヨハネ伝』にさえ、ほぼ同一の文章がある。物語は、キリストのエルサレム入城を境として前半と後半に分けられ[21]、彼は二つの試練にさらされる。上に引用した部分（Ⅲ・6）で、「不信仰の発生」があり、これに続く部分では「ユダヤ人との対決」が行われる。この部分の特徴は「イエスを試みようとした」という表現の頻出である。キリストはこれらの挑戦を無難に切り抜け、徐々に勝利の色を濃くして行く。エルサレム入城後は、祭司長や律法学者らが「イエスを恐れていた」（XI・18）、「群衆を恐れていた」（XII・12）、パリサイ人達は「イエスに驚嘆した」（XII・17）といった表現が見られるようになる。このように彼は、第一の障害除去にほぼ成功する。ただ『ヨハネ伝』のみが例外で、キリストはユダヤ人達を信仰に導くことに失敗する。ヨハネは次のように記している。

	マルコ伝	マタイ伝	ルカ伝	ヨハネ伝
障害の発生↓	• 人々はイエスを訴えようと思って、(…)うかがっていた(Ⅲ•2)。 • パリサイ人たちは出て行って、すぐにヘロデ党の者たちと、なんとかしてイエスを殺そうと相談しはじめた(Ⅲ・6)。	XII・10 XII・14	VI・7 VI・11	V16～18
全な除去障害の不完↓	• パリサイ人と律法学者たちとは、イエスに尋ねた(Ⅶ・5)。 • パリサイ人たちが(…)、イエスを試みようとして、(…)(Ⅷ・11)。 • (X・2)。 他	XII・38 XIX・3 他	X・25 XI・53 他	VII・32 VII・43 他
不完全な勝利↓	• 祭司長、律法学者たちは(…)、イエスを恐れていた(XI・18)。 • 彼らはイエスに驚嘆した(XII・17)。 • イエスにあえて問う者はなかった(XII・34)。 他	XXII・22 XXII・46 他	XIV・6 XX・26 他	(XII・37～38)
障害の再発生↓	• 祭司長たちや律法学者たちは、策略をもってイエスを捕えたうえ、なんとかして殺そうと計っていた(XIV・1)。 • 祭司長たちと全議会とは、イエスを死刑にするために、(…)(XIV・55)。	XXVI・3～5	XXII・2	XI・53
失敗障害の除去↓	• イエスは、「そのとおりである」とお答えになった(XV・2)。 • しかし、イエスは(…)、もう何もお答えにならなかった(XV・5)。	XXVI・63～64 XXVII・11	XXII・70 XXIII・90	XVIII・37 XIX・9
敗北‖欲成就望	• イエスは(…)、ついに息をひきとられた(XV・37)。 • イエスはよみがえって、まずマグダラのマリヤに御自身をあらわされた(XVI・9)。	XXVII・50 XXVIII・9	XXIII・46 XXIV・15	XIX・30 XX・14

そこで彼らは石をとって、イエスに投げつけようとした。しかし、イエスは身を隠して、宮から出て行かれた（Ⅷ・59)。

このように多くのしるしを彼らの前でなさったが、彼らはイエスを信じなかった（Ⅻ・37)。

第二の試練は、過越しの祭とともに始まる。キリストは捕えられ、審問にかけられる。ここでの特徴は、大祭司・ピラトを前にしての彼の消極性である。『共観福音書』は共通に、彼が質問に答えなかったこと、答えたにしても「そのとおりである」(XV・2）としか言わなかったことを伝えている。ここでキリストの試みは、その消極性の故に、成功の可能性を断たれている。第一の試練において、ユダヤ人達を完全に説得できていなかった彼は、捕縛の命を下され、審問という形で再び彼らと対決することになるが、彼らを説得する絶好の機会に恵まれながら、彼はこれを拒否し、殺されてしまう。

『ヨハネ伝』の伝えるキリストは、饒舌で積極的にユダヤ人の説得を試みるが、他の三『福音書』のキリスト同様、説得は効を奏さず死刑に処せられる。

このようにキリストの《histoire》は、二つの試練（目的達成のための障害除去の試み）によって構成されている。彼は最初の除去に不完全ながら成功するが、二度目の除去には失敗する。これをレシの《histoire》と比較すると、前半部はレシのそれに対応しているが、後半部は全く異っている。前半部でレシの主人公達は、障害の除去にまがりなりにも成功し、つかの間の幸福を得る。後半部での除去は成功するが[22)]、目的達成は失敗に終る。興味深い点は、両者の後半部での対称性である。レシの主人公達にとって後半部での成功は、失敗を意味したが、キリストにとって刑死

は復活への契機であり、イザヤの預言成就を意味している。目的達成の観点から見れば、これは誠に皮肉な対称と言わざるを得ない。障害の除去に成功したレシの主人公達は、成功したがために却って、Objetを死に至らしめ、欲望成就に失敗する。逆にキリストは、障害を除去できなかったからこそ、永遠の生命を獲得する。今までの議論を整理しよう。

レシ

欲望の発生 → 障害の発生 → 障害の不完全な除去 → 欲望の不完全な成就 ⇢ 障害の再発生 → 障害の完全な除去 → 欲望成就失敗

『福音書』

(誕生) → 障害の発生 → 障害の不完全な除去 → 不完全な勝利 ⇢ 障害の再発生 → 障害の除去失敗 → 敗北(欲望成就)

最後に、前半部の展開が、唯一他の三『福音書』と異っていた『ヨハネ伝』に触れておかねばならない。この伝記においては、上述したように、キリストは第一の障害除去に失敗する。これはレシの《histoire》の流れから外れるように思われるが、四つのレシの中にもただ一つ《histoire》の展開を、前半部で同一にしないものがあった。すなわち、『狭き門』において、ジュリエットの婚約はジェロームにアリサとの婚約、あるいは結婚という至福の時をもたらすはずであるが、このレシの《histoire》には「欲望の不完全な成就」という項は欠落している。ジュリエットという障害は、外部からテシエールによって除去されたわけだから、これを「除去失敗」とみなすことはできないが、ジェロームは『ヨハネ伝』前半のキリスト同様、「欲望成就失敗」という苦い経験をすることになる。

以上のように、キリストの《histoire》は、その後半部において、レシの《histoire》と全く逆の展開を見せる。この対称性が何を意味するのか、今ここで俄かに結論を出すことはできないが、それは両者の関係を否定す

るものではなく、むしろレシがその構造上も『福音書』の影響の下に書かれたことを示している。

従って，今我々は次のように言うことができよう。マルスリーヌには兄が二人いた。なぜなら、レシの構造の背後には『福音書』の構造が隠されているからである。

注

1) 拙論 "Derniers *récits* ou nouveau *roman* ?——Analyse des《histoires》dans les sept *récits* d'André Gide," *Gallia*, XXV, 1985, pp. 43～52.

2) Gérard Genette, *Figures* III, (Seuil), 1972, p. 72.

3) Gide の作品の引用は、全て Pléiade 版、André Gide, *Romans, récits, et soties, œuvres lyriques,* (Gallimard), 1975, に拠る。引用最後の数字はページ数を示す。

4) ジェロームの母親が死ぬと、この傾向はさらに強まる。彼は次のように書いている。
《(…) il (l'oncle de Jérôme) me traitait déjà comme *son fils*. (p. 512, イタリック筆者)》

5) 《…Jérôme, mon ami, *mon frère*, y(une lettre) disait-elle… (p. 513)
《O *mon frère* ! merci pour m'avoir fait connaître et comprendre et aimer tout ceci. (p. 549)
《O *mon frère*! je ne suis vraiment moi, plus que moi, qu'avec toi… (p. 552)
《Adieu, *mon frère* tant aimé. (p. 559)
《Oui! malgré moi je t'ai cherché tout le matin, *mon frère*. (p. 564)》
イタリックは全て筆者。

6) また三者の名前のアナグラムは、Blaise de Gonfreville≒Gérard Lacase + Casimir となっており、子爵 vicomte まで考慮に入れれば、子爵はアナグラム上は完全に二人の父親となる。

7) ミシェルの母親は、彼が十五歳の時に死亡し、父親は彼の婚約時に亡くなったらしい。マルスリーヌの両親に関する情報は与えられていない。

8) 「私はメナルクに、勝手にしゃべらせておいた。彼の言っていることは、まさに先月私がマルスリーヌに語ったことだった。」(p. 432)

9) エドマンド・リーチ，「なぜモーセには姉がいたのか」『聖書の構造分析』,

鈴木　聡訳、(紀伊國屋書店)、1984年、p. 70

10) 同上書, p. 105

11) 詳しくは、同上書、pp. 59～124 参照。

12) Leach は Dante の例をあげている (同上書, p. 124)。

13) 同上書、p. 95。及び同上書、リーチ、「反-ジャンル論」p. 198

14) 同上書、p. 98

15) Andrew Oliver, *Michel, Job, Pierre, Paul, intertextualité de la lecture dans L'Immoraliste de Gide,* (Lettre modernes), 1979, pp. 32～33

16) 『聖書』からの引用はすべて、日本聖書協会発行、口語訳『新約聖書』(1954) に拠る。各引用最後の (　) 内の数字は、ローマ数字が章数を、アラビア数字が節数を示す。

17) 『イザベル』のみ『福音書』との直接的な関連を見出すことができないが、外部的な事件に取材したこのレシも、明らかに『列王記・上』(XXI・1～29) に登場するイゼベルの物語を下敷きとしている。

18) この等式の成立を認めるなら、ジェルトリュードが作中ではたす役割をさらに一つ付け加えなければならない。牧師の息子の名ジャック (Jacques) は、ヤコブのフランス語名である。『新約聖書』には二人のヤコブ (ゼベダイの子ヤコブとアルパヨの子ヤコブ) が登場するが、後者は『ガラテヤ人への手紙』(I・1) で、「主の兄弟」と呼ばれている。
《Mais je (Paul) ne vis aucun autre des apôtres, si ce n'est *Jacques, le frère du Seigneur.*》(*Epître de Paul aux Galates*, Version Louis Segond, 1959, p. 237, 引用中のイタリック筆者)
『田園交響楽』のジャックが、いずれのヤコブに近い存在であるかは検討を要するが、「牧師=キリスト」であるとするなら、息子のジャックが「主の兄弟」として作中に登場させられている可能性は高い。従って、この場合ジェルトリュードは牧師の妹ということになる。

19) Louis Marin, "Les femmes au tombeau, essai d'analyse structurale d'un texte évangélique", Langage 22, (Didier), 1971, p. 39. 翻訳は、久米　博・小林恵一編訳,『構造主義と聖書解釈』(ヨルダン社, 1977年) 所載のものを用いた (p. 129)。また同書には、同じ図式を適用した Georges Crespy の例もある (p. 52) が、彼も主体を「イエス」、対象を「永遠の生命」としている。

20) 『マタイ伝』(XXVIII・1～8)、『マルコ伝』(XVI・1～8)、『ルカ伝』(XXIV・1～11) に記された「女たちが墓にやってきて、墓が空になっているのを発見する物語」(同上書、p. 129)。

21) 『ヨハネ伝』では、引用の文章はキリストのエルサレム入城以前に置かれているが、今問題となっているのはキリストの試練を構成する物語単位であり、「キリスト殺害の企図」が、「入城」の前にあるか後ろにあるかは問題ではない。

22) 除去と言っても、ジェロームや牧師は非常に消極的で、除去は外部から行なわれる。アリサが婚約を拒む理由としてあげた「ジュリエットの幸福」は、ジェロームの関与なしに達成されるし、牧師の恋敵ジャックは自らカトリックに改宗し、聖職につく。こうした主人公の消極性は、議会、ピラトを前にしてのキリストの消極性に一致する。

（大学院後期課程学生）